

「二期一会」の生き方

広東外語外貿大学三年（中国）

楊 曉 玲

「二期一会」の生き方は、茶道を通じて深く感じたことだ。それは、私たちに精神的意義と行動の指針を与えてくれたと思う。

ある夜、いとこのお姉ちゃんと、今学期の茶道の授業について話していた。「茶道には細かい点がたくさんあり、稽古にも細かい作法が多くあるので、時にはちよつと難しいです」と私が言うと、いとこは、「じゃあ、楊ちゃんは稽古している時、それぞれの作法の意味を分かっているのか。私は日本の茶道に触れたことがないが、すべての細かい点には特別な意味があると思うよ」と笑顔で言ってくれた。いとこの話を聞いて、茶道の細かい点を体験し、見直し、考え、実感し直し始めた。

まずは、今学期稽古した盆略点前について考えてみた。亭主は茶道口で主客総礼をしたり、茶を点てた後、茶碗を二回回してから、その正面を客に向けて茶を出したり、建

水を下げる時客に背を向けたりする……これらの細かい作法はすべて亭主の、客に対しての敬いの気持ちを示している。「草」のお辞儀で挨拶する時があっても、客に対していつも「真」のお辞儀と同じ敬意を抱いている。茶道の細かい、ゆつたりした作法の一つ一つは、亭主が最も良く見える方法で客に見せたいのだろうと思う。

なぜ亭主は出来る限りの努力をして、このように心を込めて茶席にいるすべての客に誠実に対応したいのだろうか。なぜこのような最善を尽くしたいという思いがあるのだろうか。これはまさに「一期一会」の思想の影響を受けているのだろうと思う。「今回の茶会で一緒に参加した人たちとは、一生に一度しか出会うことが出来ないかもしれない」と思っているから、亭主も客も、心を込めてお茶を点てたり味わったりすることに最善を尽くしている。

「二期一会」という言葉は、亭主と客に毎回の茶会や同席者と一緒にいる時間を大切にし、力を尽くして心を込めてすべての作法をし、十分に誠実な気持ち伝えることを思いうさせる。

「二期一会」が教えてくれたことは茶道そのものに対する理解だけでなく、生活と人生への考えについても理解を促してくれた。

私たちは、多くのことが何度も起こると思っていて、それが「当たり前」だと思っているかもしれない。家族とは

何度でも会えると思っただけで終わる……。

「あと数日経って、暇になってから家族に会いに行こう」と思うことがある。学生時代、試験は数多くある。試験前に十分に復習していないなら、心の中で「やめにしよう、今度またよく復習しなければならぬ」と思うが、「今度」が来ても、同じ考えをするだけで終わる……。

しかし、人の一生は短いもので、明日何が起こるか誰にも分からない。他人との出会いがいつ最後になるかも分からない。特にコロナが発生して以来、人々の生活は大きな影響を受けている。学生として、教室で授業を受けるのは当たり前なことだと思っていたが、今では教室で授業を受けたり、先生に会ったりできることは得難いことだと思っている。その他にも、今年は火山、地震、水害、戦争などという突然のニュースも聞いた。このような事件で命を奪われた人がどれだけいるか分からないが、彼らの家族や友人にとって、その別れの痛みは拭い去りにくいものだろう。

今学期、私は時々困惑している。この時代が変わって、私が多くの別れを経験したからだろうか。あるいは私が大きくなったから、見たり気にしたりすることが多くなったからだろうか。今年、私自身も家族、友人との別れを経験した。彼らとの最後の時間を思い出すたびに、夢のように感じる。時々、私はどんなに彼らとまた会いたいか！

ステイブ・ジヨブズはスタンフォード大学のスピーチ

で「毎日を人生最後の日だと思っただけで生きる」という言葉を残した。これは「一期一会」の生き方に通じるものが有ると思う。中国の作家である林清玄氏はある文章で「明日はまた新しい太陽が昇るが、今日と同じ太陽は永遠に昇らない」と書いた。この点から見ても、茶道において、どの茶会も唯一無二のものであることが分かる。茶会では毎回、茶花、掛け軸、お菓子、同席者などが異なるので、これも「一期一会」の概念の一つだろうと思う。

茶道では、亭主は「一期一会」の気持ちを持って、客のためにすべてを用意する。すべての作法や細かい点には、客への配慮や誠実さが込められている。一方、客も「一期一会」の気持ちで、お菓子やお茶に心を込めて味わい、亭主への温かいもてなしの心と感謝を表す。私も、このような生き方をすれば、身近な家族や友人や先生と過ごす時間を大切に、力を尽くして彼らと心を込めて接し、後悔を残さないように私のすべきことをしっかりやることができると思う。

人と一緒にいる機会と時間を大切に、自分のすべきことをしっかりやり、心を込めて誠実に人と接することは、茶道の「一期一会」から実感した生き方だ。